福島の蔵書印　－その３８－

石黒忠悳の蔵書印

幕末から明治、大正、昭和とほぼ一世紀近くを生きた石黒忠悳（いしぐろただのり）は、明治政府が推し進めた近代化に西洋医学の先駆者として力を尽くした人物である。

石黒の経歴は自伝『懐旧九十年』（岩波文庫）で振り返ることができる。弘化 2（1845）年、現在の伊達市梁川町に出生するが、代官所手代だった父の転任に伴い 3 歳で梁川の地を離れている。後年、梁川を訪れた石黒は「梁川の人が懇ろに待遇されますのは、いかにも心嬉しく感じております」と自伝に記している。

10 代半ばで両親を相次いで失ってからは、自らの生きる道を医学と定め、幕末の混乱期、江戸の医学所に入学、西洋医術の習得に精進する日々を送る。

維新後は、大学東校（東京大学医学部の前身）の教官として学生の指導にあたり、明治 3（1870）年には大学初の活字出版とされる、講義案をまとめた『化学訓蒙』を出版した。以後、兵部省（後の陸軍省）に転じ、軍医制度、陸軍衛生部の創設に尽力、明治 23（1890）年、陸軍軍医総監に就任する。日清戦争時は野戦衛生長官として職務にあたり、その功績から男爵を授けられた。その後、貴族院議員、日本赤十字社社長、枢密院顧問官などの要職を歴任し、大正 9（1920）年子爵。92 歳の時『石黒忠悳　懐旧九十年』を出版、昭和 16（1941）年 4 月 96 歳の天寿を全うした。

生前の石黒は、いくつかの公益事業に助力を惜しまなかった。そのひとつに、雑誌の出版で成功を収めた博文館の創業者、大橋佐平（1836-1901）が設立した私立の大橋図書館がある。大橋は病により余命が短いことを悟ると、図書館の運営を旧知の間柄だった石黒らに託した。図書館は大橋没年の翌、明治 35（1902）年開館、石黒は大正 6 年まで館長を務め、終世理事として図書館の経営に携わった。その間一切の報酬を受け付けず、自らの寄附は石黒子爵記念図書基金として積み立てられ、利子が図書の購入に充てられたという。石黒にとって図書館への援助は、医学書や洋書の入手に苦労を重ねた修行時代の記憶と重なり合っていたのかもしれない。

上掲の印影は『日本書誌学大系 79　新編蔵書印譜』（青裳堂書店）より採録した。2.3 ｃｍ四方の白の刻字が際立つ端正な朱印である。

〈地域資料チーム：丹野律子〉